源流となる技術研究への挑戦

谷 岡　健 吉

NHK 技研がこの 10 年の間に次世代放送技術として打ち出した研究の目玉は何といっても走査線数 4000 本方式とも呼ばれるスーパーハイビジョンであろう。究極の高臨場感テレビの実現を目指すこの研究の開始にも、“技研らしさ”を強く感じる。“技研らしさ”とは、社会の要請やニーズを待つのでなく、10 年あるいは 20 年以上先のあるべき放送の姿に夢をはせる研究者の情熱や先見性をもとに研究に着手することである。このスーパーハイビジョンの場合も、テレビはハイビジョンの画質で十分とする意見は一部にあっても、現状に満足しない研究者の飽くなき探究心や、技術はすべての分野で限りなく進歩し続け、将来、放送にも必ず新たな映像・音響システムが求められるとの考え、さらには貴重な受信料を財源とする研究は特にオリジナリティーがあり、世界一を目指すべきとの思いなどがその研究開始の動機の根底にあったと考える。

もっと歴史をさかのぼってみても、“技研らしさ”は常に発揮されている。放送技術に大きなインパクトを与えた技研の研究成果は数々あるが、それらを担当した研究者は、取り組みの初期においては必ずしも周囲から十分な理解、支援が得られたわけではないようである。しかし結果としては、担当研究者が多少異端児的であっても技研の組織の懐深さなどが、強い信念をもった研究者の能力を発揮させ、ハイビジョンやデジタル放送、撮像、表示デバイスなどの研究で世界に誇れる成果を生み出すに至っている。このようなことを考えると、研究者は世の中の研究動向を見てそれにうまく乗るのではなく、強く信ずるところがあれば困難であっても自らが源流となる新たな技術研究の流れを創り出そうとする精神が大事であると改めて思わされる。この源流となる技術研究を重視し、それを実用化までリードしてきたことが、放送のみならず日本のエレクトロニクス関連産業をも発展させたと言える。受信料による技術研究の理解を視聴者から得ると同時にメーカーや他の研究機関などの外部から技研が評価されてきたゆえんはそこにあろう。

そのようなことから、技研には今後も源流となる技術研究に果敢に挑戦していただきたい。これを実践するには、だれしも漕ぎ出したことのない大海原に向かうごとくで大変な勇気を要するであろう。しかし飽くなき探究心をもち、壮大な夢を己の力で実現したいとする研究者であれば、情熱や心の内に秘めた闘争心などが自身の勇気を奮い立たせてくれるのではないだろうか。

ある大学の博士号授与式で高名な学長が、新しく博士となったひとりひとりに、「あなたの研究で、世界のその分野の何が変わったのか？」との質問をされたとのことである。厳しいが、まことに的確な問いかけであるとも感じる。国民人口の減少や効率化などのさまざまな社会状況の変化の中で、技研の研究者数もこの 10 年間で少なくなっている。しかし悲愴感に陥ることはない。まさに研究者ひとりひとりが、源流となる新たな技術研究を意識して自己研さんし、それぞれの分野で変革を起こせば、技研の存在意義はさらに高まるであろう。

最後に、スーパーハイビジョンの BBC（英国放送協会）などとの国際連携による研究が今後一層進展し、技研発のこの次世代テレビ技術の実用化がやがて世界中で加速されることを祈って筆をおく。

谷岡 健吉